福沢翁頌歌

来し方に頭を廻らせば烏兔匆匆にして昔日の幼童はや白髪のお書生となれり
苦節の道程に思ひ致せば言外の感慨胸底に溢れ心底また一掬の涙なしとせず
揺籃を出づるより赤貧を洗ひ茅屋に粗餐を食みて十年一狐裘に過ぐす
然れども檻樓何ぞ人品を定めん弊衣いかで骨柄を貶しめんや

未だ老耄及ばぬ頑健は鉄工に呻吟せし紅顔の日々に濫觴あり其に胚胎す

炎天に鉄塊を担えば戎衣汗涙に重く秋霜の夜半に独り学べば困憊に眼瞼重し
然れどもこの広き世に何事か我の為すべきものあらん

天が下一隅いずこにか必ずや我を生かすべき道あらん

其を為し遂げん其の道を生きんとすの唯一念に己を叱咤し懸命に睡眠を瞠る

北斗の煌きは苦境葛藤の少年を肅然と見守り

月中の嫦娥また逆境独歩の人の子に婉然と微笑む

疾風に剉草を知るの喩へあり艱難汝を玉と為すの訓へあり

また楊柳茂り易くとも秋の初風の吹くに堪へめやの戒めあり

されば我は風雪の星霜に堪へて屹立する松杉とこそならん

されば刻苦以て大地に我が根を深めん勉励以て空に我が幹を攷々と延ばさん

幼少より連綿す辛苦の粒々は識らず我が魂魄を外柔内剛の玉と磨く

炎帝の酷熱何ぞ我が志気を溶かさん冬將軍の氷雪焉んぞ我が志操を凍らせん

天の与へし境涯を恨まず不屈と力行は踵を接し不撓と渾身は背を重ねる

斯く自ら待み自ら助く蛍雪の歳月を経て十有五にして学び舎を出づ

而して壮年に至りて私塾に後生を諭し啐啄合致の機を窺ひてその学びを援く

豚兒等の呈する束脩はその額多からじといへども我が質朴の湖口に足る

糟糠の妻と喫す一碗の粗茶に心安らぎ賢治に倣ふ四合の玄米に五尺の身を養ふ

豈羨まん塵界の奢侈安んぞ崇めん俗界の富貴

先哲の遺し給ふ千古の詩文は至高の美衣にしてこれを纏ふ

我れ凡にして文藻豊かならずと雖も貧しき才を絞りてその驥尾に附さん

先賢の与へ給ふ公理は至上の美食にしてこれを玩味す

我れ鈍にして叡智煥発ならずと雖も乏しき知を尽くしてその教へを継がん

やがて江湖に問はん蟹行の玉梓は我が畢生の数理論述にして

老骨彫心の爪痕はその行間に滲み老生鏤骨の足跡はその紙背に浮かぶ

顧みれば羊腸の急坂遠く下方に霞み遙けくも登り来しこの山嶺の高み

心中密かに誇る茲に老ひの小花一輪孤高に咲くの感あり

而して雲海を抜いて聳立する泰山の頂は尚峻巖懸崖の彼方にして道遠し

前途茫茫にして亡羊の嘆ありと雖も更に一步を進めん齡七十の早春

寒に綻ぶ紅梅は我が目を慰め竹林の清風を渡る春鶯囀は我が胸を励ます

老ひて学ぶ亦樂しからずや学びて覚る亦嬉しからずや

今ぞ莞爾と面を挙げ満腔の信を以て言はん我が辿りし生は天に愧じずと